

やまがた再発見

535. 佐藤 十弥 ①

エッセイスト 高橋 まゆみ

斬新な発想と類いまれな力量で、酒田のデザインや文化を彩った佐藤十弥(1907〜80年)。詩人、グラフィックデザイナーの彼が遺した数多くの著書や出版物はいずれも少数、稀にみる趣向の希少本であった。自伝的詩集「かざられる物語」に次ぐ句集「踊り」は、透かし入りの越前和紙の原稿用紙を秋田杉板で表装した無綴りの装幀で、十弥のアイデアを表現した小松写真印刷(コマツ・コーポレーション)の確かな技術を示す逸品であろう。

詩集「つづらなるもの」は、十弥が本邦唯一と自負した円形本で、金属の輪で綴じた製本。このユニークな円形本は「円形詩集、どこを綴じるか



十弥が他界した翌年、日和山公園に詩碑が建立された＝酒田市

(略) 表紙をつけて中は一枚一枚じゃダメかなと考へ大いに楽しかった」と、十弥は振り返っている。

画才に秀でた十弥の初期の画風にシニールレアリスム(超現実主義)の影響がうかがえるが、テーマは内なる「女性への憧憬」であろう。それが最も表現されているのは、詩画集「髪譜」かと思う。9人の兄と姉がいて母の市代が老齢であり姉が母親代わりだった幼少期、父の広が産婦人科の開業医という環境は、

慕情、孤独の発露 創作に

自由人で神経質

先妻を亡くした十弥は酒田で再婚した。妻の芳子とはスキー場で出会った。高校時代にバスケットボール部に所属

(略) 森鷗外の自伝的小説「キタ・セクスアリス」にも似た少年の「性愛」の経験や第2子を産む際に命を落とした先妻への哀惜など、屈折した異性への愛と幻想の発露であったのではないかと思う。

長女の田中蒼子さんは子どもで神経質な父の気持ちを感じながら行動したという。十弥は食べ物の好き嫌いが多く、昼食はきまって木村屋のフルーツパンがあればご機嫌だった。

蒼子さんは「父は、本当は孤独だったと思う」と語る。



芳子が買い求めた作品は、長女田中蒼子さん宅に飾られている「絵と詩」より

十弥は著書の中で「クロード・ルの『墨 黒き汁の歓喜 凝れる金』とまではゆかないまでも筆を走らせているうちに空想の甦えるのを覚えた。(略) むかし、和紙と面相毛書だけを携えて外国で暮らせないものかと考えたことがあ

を信じて表現と向き合う時間が必要なのである。こんなエピソードがある。十弥が主役となる出版記念祝賀会が開かれた時の話だ。「来ねんだ、彼。どうとう本人不在での。あと『何しつたな』って聞いたら、『魚釣りさ行つた』って」とは、当時の酒田の芸術文化界を担い、十弥とともに「三佐藤」のひとり数えられた親友の佐藤三郎の談話である。

海に生きた人海に死んだ人海を愛する人海を憎む人かささまに海に向つて立ちほだかるだが海は海なりの姿で時に微笑み時に怒りのチエロを奏でる

大火、詩に託す

晩年、乞われれば誰にでも快く絵を描いたという十弥だったが、描いてもらえなかつた人がひとりいる。妻の芳子だった。「十弥さん、私には描いてくんなあけ」。芳子は、自宅に1点もなかつた夫の作品を飾りたいと、生前最後の個展が開かれていた酒田の「ともえ画廊」で買い求めた。その作品は現在、酒

酒田市民芸術祭20周年記念の特別作品として作詞を委嘱された創作曲「海」の一節である。この曲は76(同51)年11月3日の公演で演奏される予定だった。目前に控えた10月29日夕、酒田市は未曾有の大火に見舞われた。鎮火までの11時間、中心市街地の1700棟以上を焼き、公演は中止となった翌年、被災した市民の心情を吐露する内容が加筆され、初演が実現した。その時、海は水神の役を放棄し、それに通ずるに新井田川の川面を紅に染め、紅の水が海に出て、荒れ狂う波浪の中に消えて、一つの悲劇は終焉した。海のロマンのかげで、ひそやかに頁をくる／今一つの巨大な悲劇の物語

田市内の蒼子さん宅に飾られている。1980(昭和55)年4月のことである。横を向く女性の首筋に爬虫(とかげ)が絡みつくこの作は、まるで自らの余命を悟つたかにも思える。

この年体調を崩した十弥は、酒田の病院から東京・駒込病院へと転院した。先妻との間に生まれ、東京・町田に住んでいた長男の佐藤鷹生さんが看病に当たった。酒田からも芳子が出向き、当時学生で在京していた茂枝さんの長女、村上千香さんの住まいから病院に通った。担当医から危篤状態と告げられ、院内に留まろうとした芳子に対し、十弥は「なんで帰らねえんだ。いっつと寝られねがら帰れ」とひとりになることを望んだ。夜中に連絡を受け、駆け付けた時には、十弥は既に息を引き取っていた。80(同55)年5月14日のことであった。翌81(同56)年、有志によ



装幀本展を控え、出品作を整理する佐藤十弥＝1972年ごろ

奇人であり、貴人。
はたまた破天荒で、
多くの人々から愛された。

死の5年前、十弥は詩集「私の紋章」を出した。次の一節がある。「せめて 自らの戒名を／自ら名のることを許してほしい／閑院院落葉十巡居士／蚯蚓と戯れつゝに眠る／享年 歳／心ある人よ／この二文字だけ埋めて欲しい」。自分の死さえもデザインした佐藤十弥という不世出の男が、酒田に生きたことを忘れたくはない。